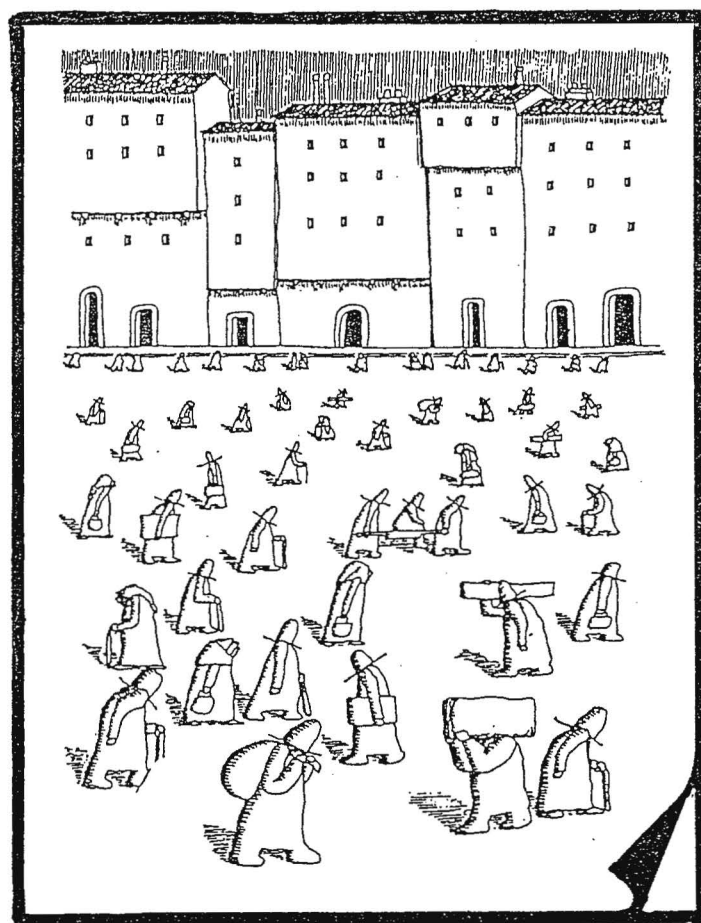


会 報

第 4 号



カルロス・ディアス(1984)部分

京都大学地理学談話会

1993

◆ 中都市に生きる ◆

由比浜省吾

岡山は、小学生の時に父に連れられて山陽路を旅行した折りに後樂園を訪れた以外は、大阪から高知への往復の途中の通過地点に過ぎなかった。旧制高校の三年間を除いて大学卒業まで京阪神三大都市で暮らした私が、思いもかけず喜多村俊夫先生、河野通博先生に呼ばれて岡山大学に赴任したのであったが、それ以来定年を迎えるまでずっと岡山に住みつき、ここを終生の地にするなどとは全く予想もしていなかった。しかし地理学者にとっては、どこであれ住めば都である。大都市地域から見れば、地方都市は種々の点で見劣りするのは確かである。しかし逆にいえば大都市にはない魅力があることもまた事実である。大都市のようなものすごい交通渋滞はないし、自転車で十分に行動できること、一步中心を離れると田園が広がり、周囲には緑の山、野鳥の群れる清流があること、適度の知名度と匿名性があること、そして地方都市なりの歴史的、文化的遺産のあることなどである。大気汚染、喧噪、混雑が甚だしい大都市から離れて地方都市の生活になじむと、結構楽しいものである。

私は織田武雄先生の弟子だから、師にならって五時を過ぎると生き生きしてくる。三十年以上通いなれた酒場は今日でもカラオケなど置かず、常連は職業はさまざまでもみな友達で、酒と肴と談論を楽しむ。隣に腰掛けた人たちと口もきかずに、自分たちだけで飲むなどということはない。これはまさに地方ならではの雰囲気である。

とはいっても、地方都市にはそれなりにいろいろと問題もある。地方に住んでいるからには、現実の諸課題について研究室に閉じ込もつての研究だけではすまされない。この場合に二通りの活動がある。第一は県や市の委員に委嘱されて発言する活動である。しかし、これは当局が無難と認めない限り指名されない。私もいくつかはこの種の委員を委嘱されたが、それは私が無難というよりは、専門がらやむをえなかった場合もあると思う。第

二は労働団体や住民運動などと提携して活動する場合、これは本音がものをいう仕事である。私は自治体の労働組合その他と長期間かかわってきたし、いくつかの住民運動団体に加入し、そのうちの一つの代表者でもある。より住みよい民主的な地域・自治体をつくろう、また環境保全を図ろうとする際、研究者メンバーへの期待は大きい。いずれの場合であっても、地方都市にあつては方針や提言を集約すれば自治体首脳と直接交渉することがしばしばある。常に自戒している点は研究者が社会的発言・行動をする場合、その責任が大きいことである。

当局から委嘱されて仕事する場合には、かなり予算がつけられることが多いけれども、開発計画にせよ、再開発案にせよ、総合計画の骨格作りにせよ、委託者の報告を見ると疑問が多い例がしばしばである。大手資本の背景を持つコンサルタントにせよ、学者グループにせよ、はたして十分に責任のある報告なのかと感ずることが多い。そして当局側もまた次々と責任者が交代するから永続して責任をとる体制ではない。税のむだづかいが実に多いのである。それに対して、有志が集まった貧乏団体は討論、提言も実に真剣である。そして将来を見据えて地域を考えようとする。そこには、生半可な「研究者」などは一蹴されるほどの豊かな発想がある。研究者たるものはその状況の中で理論を供給しもまれ、かつ指導力を発揮することが期待される。

だから私は研究を土台として実践すなわち社会的活動に踏み込むことが、地方に住む研究者には大都市以上に求められていると思う。岡山県南部の児島湖は湖沼法に指定されたほど汚濁が進んでいるが、私の入っている住民運動団体は児島湖条例の制定を求め、条例案まで具体的に作成して県当局に提出した。結果は一部は受け入れられなかったけれども、かなり大筋において私たちの主張を盛った県条例が制定された。一方ではこのような建設的提言をすると同時に、他方では客観的に不当と判断される行政計画に対して関係住民を支援し、またその支持を受けつつ、いたるところで行政批判をしてきた。

私は別段政治が好きではないし、政治にかかわる気持

ちは毛頭ないけれども、「応用地理学」が真価を問われる際には、現実の生々しい事態の中で勇気をもって発言する必要があると思う。まさに生きた勉強である。地域住民や労働組織と連帯し良心的行動をとるのは、地方都市の方が面白いし、しがいがあるのではなかろうか。といつて何も地方の問題にのみ埋没しているわけにはいかない。国際交流も必要だし、現実にも学生も教育しなければならない。大学に籍を置いているのも楽な仕事ではない。

+++++講演会の報告+++++

1992年11月6日、談話会懇談会を開催しました。文学部博物館での講演会では中山修一先生と月原敏博さんに発表していただきました。内容を簡単にご報告いたします。

◆長岡京研究の最近の成果◆

中山修一

長岡京もだんだんと研究が進むとこれまで私がたててきた仮説が次々と打ち破られることになりまして、私はそれを楽しみにしております。私が最初、長岡京を復元したときは長岡京の縦、横の道は平安京の縦、横の道と思っていた所がどうもあわないんです。それからまた朱雀大路はある程度、推測できたのですが、その東や西側の南北の道がどうにもあわないのです。そういうことで何年か来たのですが、ここの卒業生の高橋美久二君が長岡京の西二坊大路を発掘したときに、これは長岡京は平城京タイプであるということを申しました。それによって縦、横の道を平城京タイプでやりますと、ほぼそれに近いところに道路が出てくるわけなんです。それを十四、五年間、高橋君が長岡京は平城京タイプであると言って、全国の考古学者にはだいたい受け入れられておったのですが、向日市埋蔵文化財センター局長の山中君がいろいろやってみると、どうも長岡と平城は違うんだということ、最近何回かの調査員の寄合で申しました。

山中君はいちいち発掘から報告されたものをもとにして、平城京は四百、四百というような並び方をしないということに気づきました。平城京の代表的な建物を一つの町を四百尺四方としてやっていると、平城京の町はもとも四百尺四方という原則が一応あるが、案外それが神経質に守ろうというような意欲が表れていない、南北の条坊が四〇〇尺、四二七尺、四一七尺、四〇〇尺というように、いろいろ縦も横も違うということをいちいち屋敷と綿密に照らし合わせて申しました。長岡京の方はだいたい四〇〇尺あるいは四五〇尺で、一定の大きさにしようという意欲がよく表れている、これは非常に奈良と長岡京との違うところである、ということを彼が説明してくれました。で、これまで高橋さんの主張された長岡と平城とは同じタイプで、平安京とは違うんだというのは、ここ十四、五年権威をもっておったんですが、今度そうでないということになってきました。

それから遺物ではどんな違いがあるかということ、例えば緑釉陶器というのがあるんです。中国ではこの時分には唐三彩といって非常にきれいな三彩があるんですが、日本ではだいたい長岡京の時代に三彩というよりも緑がかつた土器が出てきて、それが一般の食器なんかにはまだ使われなくて、火炉だとかいろんなものに使っているんです。それから灰釉、灰で意識的にうわぐすりを使うということも長岡が奈良からだいぶ進歩したところ。また黒陶といって、黒くて中の方に手をつけてもすすがつくような土器も長岡京の頃からだんだんと使われるようになりました。そういうふうに遺物と、またいろいろ申しました条坊の割り当て方が奈良と長岡では相当変わっていることが最近の成果です。

ところで桓武天皇の対宗教政策、とくに南都七大寺に対する政策をみますと、彼が皇太子になってから摂政のような仕事をする時期が三、四年ありますが、その頃になりまして、まず個人の家で寺をつくることを一般に禁止しました。それから僧侶が檀家にも出入りすることも禁止しました。仏教会の人事についても、自分の目をつけている僧を登用しました。そういうことで、奈良の七大

寺の人々は桓武天皇に対して非常な恐れをいっていたわけですね。だから都を平城京から長岡に移そうとしても、随分と七大寺は反対しますし、それから遷都を止めようとする動きがあったのではないかということが最近強く感じられるのです。従って最初の頃に建てられたと思われる、大極殿とか、それにしたがう建物の瓦は全て難波宮から来たということがはっきりしていますし、だからその他にもこの長岡京の初期につくられた建物の瓦は、ほとんどが難波のものでして、平城宮のものは極めて少なくなっております。

ところが藤原種継の暗殺事件が起こって、種継も死ぬし、また皇太子は自分で餓死する。そして皇太子の役所におったいろいろな人が殺されたり、流されたりする。桓武天皇の宗教政策に反対する奈良の人々の一番の頼りは親王禪師の皇太子と佐伯今毛人であるわけなんです。佐伯今毛人はこれまで非常に造宮に力があつたと評価されているんですが、どうもやっぱり奈良の七大寺の方から頼まれて口を出すのが佐伯今毛人と皇太子ではなかったかと思われまゝ。そして皇太子が餓死しまして、しばらくたち佐伯今毛人も太宰府にとばされまして、本当から言えば造営の技術とか、ことに土木なんかの人の使い方は上手であるし、彼自身は一年のほとんど勤務したように記録されているまじめな人でした。けれどもやっぱり桓武天皇にとばされまして、それから始めて奈良の都をどんどんつぶして、その建物を長岡京に移して来たということがここ三十数年の発掘で分かるわけです。結局、これまでは天皇と彼が信用する種継、それから種継と手を握っていたが、都をつくるにあたってだんだんと皇太子との間に個人的ないさかいが起きてきたというように思われていましたけれども、そうじゃなくて長岡遷都を止めさせようとする力と仏教をもっと大事にしてほしいという力が皇太子と佐伯今毛人によって天皇の思うように仕事をさせなかったんではないかと、この頃は思われるようになってきました。

現在、長岡京で二回掘りますと、一回は必ず弥生の土器か石鏃、石斧が出てまいります。だから私などが現場

を回りましても、これらは全然報告の対象にはなりません。縄文につきましても、長岡京だけでも多くの遺跡、遺物がみつかっております。古墳時代もこれまでは穴の部分だけの調査でしたが、現在は古墳時代の村が随分と分かってくるのであります。飛鳥、奈良時代も、最初私らが報告していた頃は、飛鳥、奈良と言うたら、長岡京の遺物として報告書に書かれている場合も正直言うたらあるんです。ところが現在は奈良時代と長岡とは遺物でははっきり区別できるようになりました。平安時代におきましても、やはり緑釉陶器の問題などで明らかに平安のものだというようなものが出る場所が特定されてきました。それから鎌倉、室町とか織田、豊臣、徳川のものも最近は遺跡として発掘調査いたしますので、その方も随分と分かってまいりました。

そんなわけで九八二回におよぶ発掘の結果、長岡京は日本での発掘の聖地の一つに後ではなるんじゃないかと思っております。幸い私は年齢で、どの市長、助役、よりも一番年寄りですから、その役がそれなりにあるんじゃないかと思つて、今後努力するつもりであります。

◆家畜を通じたヒマラヤ高地の環境利用◆

ネパール・クンプ地方の現代と家畜種構成の変化

月原敏博

いろいろな地域を訪れまして、私が強く思ってきたことは、ヒマラヤ地域は簡単には説明できない、非常に多様であるというのが率直な感想で、川喜田先生が言われたことよりももっとミクロなスケールで、つまり個々の地域事例やチベット文化圏の多様性、統一性をよりよく理解できるような観点を得たいということがあつたわけです。で、それを理解するうえで言いたいことは家畜種構成が重要であるということです。

具体的にクンプ地方をみながら、なぜ家畜種構成が大事かを説明していきたいと思ひます。クンプ地方ではヤ

ク、高地種のウシ、ヤクとウシの一代雑種のゾの三つが主に飼われています。ヤクは標高の高い所でもっとも適し、寒い所で強く、高山の移動牧畜を要するのです。ウシは農耕村落付近の標高で適し、日中、日帰り放牧しても夜には建物の中に入る保護を必要とし、飼料への依存度も大きい定着畜産的な家畜です。ヤクとウシの間にできるゾは標高、寒冷への適応度、舎飼い、冬季飼料の必要性でも、ヤクとウシのちょうど中間的な性格です。

ヤク、ゾ、ウシとも雌の場合は乳をとるのが目的になっております。雄の場合、ウシを除いて輸送が目的です。高地種の雄ウシは体が小さく、力も弱いので役に立たない。住民はゾの生産のために飼っているといえます。

ヤクをもつ世帯は非常に数が少ないです。しかもヤクの頭数はそれぞれ十頭から三十頭持つようなかたちで、一頭、二頭の雌ヤクを持つ世帯はありません。これはなぜかという、大きな移動牧畜をする際に、ある程度の頭数の規模があつて、そして夏の放牧地でたくさん乳をとるのであれば、保有するのが難しい、世話をするのがめんどろうだということに一つ理由があるからです。こうした世帯はヤクの他、ゾやウシなどを持っていますが、これらすべてが雄ウシを持っているのはゾをつくるためです。この雌ヤクを持っている世帯では、一般に夏の時期に二つに群れを分けて、カマとオマジヨという群れをつくりまします。乳の出る雌ヤクは全部オマジヨに入れて人がつきます。そして乳の出ない雌ヤクや輸送の仕事のない雄ヤクはカマに入れられて、野放しのように高山に放っておかれます。一、二週間ごとに飼料をやりを訪れる程度です。

ヤクを持たない世帯は雄ゾあるいは雌ウシ、またはその両方を飼っている世帯で半分以上を占めています。頭数は最大四から五頭ぐらいまでと少なく、二、三頭ぐらいの規模です。それ以外の世帯は雌ゾを飼っている世帯です。これらの世帯は雄ゾや雌ヤクの輸送でアルバイトをして現金収入を得ています。また移動の形式はヤクほどに大きくなく、農村近くで雌ヤクの代わりに乳を取るのに便利だから雌ウシを持っています。また雌ゾは比較

的乳をよく出すので、ちようどかつて雌ヤクをもって大きな移動牧畜をしていたような世帯がこういう例の中には多く見られます。つまりかつてたくさん放牧地や採草地を持っていますから、このゾなども比較的たくさん飼えます。

家畜種構成の歴史的変化はいくつかのデータによって知ることができます。家畜種構成の変化は外部経済の変化とあわせて見ることで、逆に、家畜種の変化から経済変化がもっていた意味をはつきりさせられますし、経済変化と家畜種変化がよく対応していることが分かります。一九六十年代まで雌ヤクを中心にしていたものが、一九七十年代以降、雌ゾに移るのは、ちようど雌ヤクをたくさん飼っていた世帯が、雌ヤクを飼わなくなって雌ヤクの乳を得る代替として雌ゾを選んで、そしてさらに、雌ゾで乳を得ていてもほとんど意味がない、それよりも現金収入で乳製品などはマーケットで買ったほうがよい、そういったことで、雄ヤクや雄ゾの輸送力をもって、現金収入をめざすというようなかたちに移ってきたということです。家畜の種類をうまく変えれば、外部経済や社会変化にも適応できるという意味で、家畜種構成は住民の経済をうまく運営するうえでの動的な基軸の役割をもっていたと考えられます。

最初に戻って言いたいことは、必ずしもこのような変化なり雑種の意義が他の地域で適用されるというわけではないが、少なくとも多様な自然環境や生業の重み付けの違いをもつ、つまり農業、牧畜、交易とは一口に言っても、その重み付けが変わり、そしてその複合の具合が変わっていくチベット文化圏の多様性と統一性を考えるうえでも、一つの重要なキーになるに違いないということが言えるのではないかと思います。

井月原さんの発表の内容は次の論文にまとめられていますのでご参照ください。

月原敏博「生業戦略におけるヤク－ウシ雑種：
ネパール、クンプ地方の家畜種構成とその変化」
『農耕の技術15』、1992年、pp.42-62。

++++ 関東支部例会報告 +++++

浅井得一・浅井辰郎

立春も過ぎましたがまだ寒さが続いております。さて昨年七月十九日東京大手町の「臺」で例会を開きました。当日老幹事に代わり新幹事をお願い致しました処、次の方々が決まりましたので大変安堵致しました。ここに連絡先を記し、ご披露致します。

木下 良君 自宅：[REDACTED]

吉田敏弘君 自宅：[REDACTED]

勤務先：国学院大 TEL 03-5466-0245,6

小田匡保君 自宅：[REDACTED]

勤務先：駒沢大 TEL 03-3418-9259,61

四月中旬に関東支部の浅井辰郎先生より地理学談話会に野間三郎先生追悼文集(理論地理学ノートN0.8<1993>)をお送りいただきましたことをご報告しておきます。

+++++ 研究室のページ +++++

本年度は新しく五名の三回生と二名の聴講生を迎えました。簡単にそれぞれの自己紹介をしてもらいました。

三回生

…有村洋一郎…

学士入学で、3回生に編入した有村洋一郎といいます。2年前に京大理学部を卒業して、いったん就職しましたが、教員を志し、再び京大に戻ってまいりました。出身は福岡県福岡市です。主に都市に関する地理について興味をもっています。どうぞみなさん、よろしくお願いします。

…大山晃司…

神奈川県川崎市麻生区出身。神奈川県民といっても、新宿から30分の小田急線沿線に住んでいて、遊びに行く

にも東京に行くことが多く、いわゆる”東京者”です。(ただし東京都民には県民と言われる。)川崎球場のある川崎の町にもめったに行きません。ただ生誕地は京都の北野病院です。母親の実家が京都で、今はそこから通っています。最近はビートルズとクラシックにはまる毎日。高校時代はワングルでした。よろしくお願いします。

…門井直哉…

景観の復元や場所の意味を考察することに興味が有り、歴史地理をやりたくてこの専攻を選びました。あちこち出かけるのが好きで、長期間の旅行にも行きたいと思っていますのですが、趣味で所属している吹奏楽団の練習が毎週日曜にあり、しかも大学の長期休業の時にはコンクールや演奏会のシーズンとなってしまうため、過去2年間はなかなか思うようにはいきませんでした。最近はこのことに一番頭を悩ませています。

…祖田亮次…

1970年京都市右京区太秦に生まれる。73年に城陽市に移住。城陽市立寺田小学校、久世小学校、私立立命館中学校、高等学校、さらに河合塾、駿台予備校を経て91年京大に入学。現在は左京区浄土寺にて下宿生活。渴ききった青春に潤いを与えてくれるのは、愛機ホンダGB250である。この名機(?)の性能を優しく鋭く引き出してやることが私の当面の関心事である。

…林 美歩…

大津市の自宅から自転車とバイクと自動車を使いわけて通っています。体育会サイクリング部に所属していて、1,2回生の2年間で日本国内はかなり自転車で旅行しました。登山も多少やります。車の運転も好きです。でもまだ下手です。勉強はしていなかったのも、何もわかりません。とにかく今は地道にやっついていようと思っています。

聴講生

…川端紀子…

はじめまして聴講生の川端紀子です。大阪から二時間かけて毎日通っています。電車を乗りついで京都についたときにはぐったりしているのですが、出町柳の川べりをみると元気をとりもどし、教室へと足を運んでいます。

京都には見たいところがたくさんあるので時間のかぎり
いろいろなところへ出かけてみたいと思っています。早
稲田の杜で過ごしたときとはまた違った学生生活がおく
れるのではないかと楽しみにしております。専門はフラ
ンス文学でしたので、わからないことばかりですがよろ
しくお願いします。

…篠山員枝…

理学部で化学を学んだ後、女子校で教えながら国史に
学士入学しました。国史では、8世紀の経済史を研究しま
したが、しばらく古代史を離れ、違った視点から眺めて
みたいと思い、地理の方でお世話になることになりました。
寺田屋のすぐ近くに住んでいます。付近には酒蔵や
昔からの町屋が残っており、しばしば散策を楽しんでい
ます。よろしくお願いします。

昨年度夏から修士過程の佐藤康也さんが文部省科学研
究費でエチオピアに滞在、調査していますが、今年度は
博士過程の北内陽子さんが1993年6月より2年間の予定で、
外務省から在コートジボワール日本大使館専門調査員と
して派遣されることになりました。周辺地域の経済動向
の調査とあわせ、熱帯雨林の焼畑の現状、プランテーシ
ョン化の過程とその社会背景を調べたいということです。

また昨年度の学部卒業生、大学院生の就職先、進学先
等は以下のとおりです。

・学部卒業	足立 郁子	兵庫県総務部教育課
	糸原 健	富士電機
	大平 晃久	大学院人間環境学研究科
	米家 泰作	大学院文学研究科
	神力 弘幸	電通国際情報サービス
	中山 耕至	理学部聴講生
	堀 健彦	文学部聴講生
	御手洗政治	アルプス社
	六嶋美也子	O G I S 総研
・修士修了	渡辺 浩平	帝京大学文学部
・博士課程	月原 敏博	大阪市立大学文学部

● 1 9 9 3 年 度 講 義 題 目 ●

講義	教 授	成田孝三	人文地理学序説
”	教 授	応地利明	地域環境学概論
* 研究	教 授	成田孝三	情報化と大都市
* ”	教 授	応地利明	アジア都市史論
* ”	助教授	金田章裕	都市景観の歴史地理 学的研究
* ”	人間環境学 研究科教授	足利健亮	歴史地理学における 資料批判
* ”	人間環境学 研究科教授	青木伸好	地域構造の比較 研究法
* ”	総合人間 学部助教授	山田 誠	日本近代化の地理学
* ”	講 師	長谷川孝治	地図史研究の フロンティア
* ”	講 師	相馬秀廣	自然地理学：アジア 大陸の環境問題
* ”	講 師	西村 進	考古学と自然科学
* ”	講 師	松井 健	フォークククタクソ (集中講義)
演習Ⅰ	教 授	成田孝三	地理学研究法 Ⅰ
”	教 授	応地利明	” Ⅱ
”	助教授	金田章裕	” Ⅲ
演習Ⅱ	教 授	成田孝三	人文地理学の諸問題
	教 授	応地利明	
	助教授	金田章裕	
講読	助教授	金田章裕	ドイツ地理書講読
”	講 師	高橋 正	フランス地理書講読
* ”	人文研助手	石川禎浩	中国書講読
実習	講 師	森 三紀	地理学実習
	助 手	山崎孝史	
△演習	教 授	成田孝三	地域の諸問題
	教 授	応地利明	
	助教授	金田章裕	

* は大学院と共通 △ は大学院のみ

地理学談話会1992年度（1992年4月～1993年3月）

会計報告

【資金会計】		(単位、円)
収入	年会費	180,127
	繰越金	307,384
	計	487,511
支出	運営費への振替	147,362
	次年度への繰越	340,149
	計	487,511

【運営費会計】

収入	資金会計からの振替	147,362
	秋季懇親会会費	126,000
	論文発表会会費	157,000
	計	430,362
支出	秋季懇親会経費	112,064
	論文発表会経費	170,780
	会報等印刷	38,080
	通信・文具費	96,422
	発送アルバイト代	12,800
	その他の経費	216
	計	430,362

訃報

前回の「会報」発行以降、次の方々が亡くなりました。
つつしんで御冥福をお祈りいたします。

確認分、カッコ内の数字は卒業年、敬称略。

矢守 一彦	(S28)	1992. 8
木村 辰男	(S32)	1992. 9
伊藤 博	(S13)	1992.12
川崎 健史	(S11)	1993. 3
君塚 進	(S32)	1993. 3

お知らせ

◎以下の会員の方々の住所が不明です。ご存じの方は談話会事務局まで御一報下さい。

数字は卒業年、敬称略。

都子 彦(S15)	今井 平八(S19)	田島 渡(S23)
舟場 正富(S35)	林(東)洋子(S40)	山田 憲子(S40)
太田 正孝(S42)	岡本 靖一(S42)	石角 強(S45)
福田 新一(S46)	池内琳太郎(S48)	飛田 雅孝(S49)
西沢 仁晴(S49)	生田 博文(S51)	長谷川正雄(S52)
遠藤 正雄(S53)	山口 一朗(S55)	河口 隆洋(S56)
山下 和久(S57)	松本 弘史(S58)	指尾 喜伸(S63)
坂根 伸治(S63)	小口 稔(H 2)	

◎今年度の談話会会費をまだお支払でない方は、同封の払込用紙(京都8-21457)にて、1,000円をお支払い下さい。

編集後記

冊子の編集など生まれて初めてのことで、教室の先輩方の作られた会報を参考に、というよりは模倣して作ったことになりました。新しさにかける点はお許しいただきたいと存じますが、会報の内容、形式などについて何か、ご意見、アドバイスがございましたら、どうぞお知らせください。

：滝波章弘

会報 第4号

発行日 1993年6月10日

発行者 地理学談話会

〒606-01

京都市左京区吉田本町

京都大学文学部地理学教室内

TEL 075-753-2793 (直通)